

事業名	平成 23 年度能登キャンパスゼミナール事業 「伝統的景観・間垣の継承に関する調査研究」	
実施主体	金沢大学 松下ゼミ	
活動形態	活動場所	輪島市上大沢地区、および大沢地区
	活動人数	金沢大学地域創造学類 4 名、地域住民 12 名 計 16 名
	期間	平成 23 年 11 月
活動内容	<p><背景></p> <p>冬の日本海から吹き付ける強風から家屋を守るために、ニガタケなどを組んで設ける間垣。冬の輪島の伝統的な景観として知られているが、地区の過疎化、高齢化により維持管理が困難となり、存続が危ぶまれている。そこで、学生が間垣補修を体験することで、地域外連携による間垣の持続的な保全支援活動の在り方を検討する。</p> <p><課題></p> <p>間垣の設置や補修など、一連の作業を体験することにより、学生の力で間垣の補修が担えるかを検証する。</p> <p><活動概要></p> <p>【ニガタケ採取】</p> <p>11 月 10 日に、輪島市大沢地区の裏山で、間垣の補修に使用するニガタケの採取を実施。地元住民に伐採のコツを教わりながら、半日かけて約 150 本採取した。</p> <p>【間垣の補修】</p> <p>11 月 20 日に、上大沢地区で集落の共有空間である日吉神社と集会所の周囲の間垣補修作業を体験。学生にとっては初めての体験で、地元住民から竹の挿し方や道具の使い方などの指導を受けながら取り組んだ。この日は途中で雨風が強くなり、予定していた作業を終えられなかった。天候に左右される間垣補修作業の難しさを体感した。</p> <p>続いて、11 月 24 日に、大沢地区で海岸沿いに建つ個人経営の旅館の間垣の補修作業に取り組んだ。早朝から作業を始め、途中強風に見舞われながらも半日ほどで終了。上大沢地区での体験で、ある程度コツをつかんでいたこともあり、作業は比較的スムーズに進んだ。間垣補修体験の様子は、DVD の映像資料や地域広報紙（リーフレット）にまとめた。</p> <p>学生からは、「当日は雨風が強く、梯子から何度も落ちそうになりヒヤヒヤする場面もあった。間垣からは日本海の荒れ狂う海と共に暮らす輪島の人々の知恵や強さが感じられ、間垣のある風景を残していく大切さを感じた」との感想もあった。</p> <p>【意見交換会】</p> <p>作業終了後に開かれた意見交換会では、学生を受け入れての初めての間垣補修作業について、まずまずの評価を得た。ただ、日程調整や宿泊場所の確保など、学生を受け入れる体制の整備を心配する意見もあった。</p>	

<活動成果>

地元住民の指導もあり、学生による間垣補修支援の可能性を確認できた。平成24年度以降も、空き家や居住者の高齢化により間垣の補修が困難なところを優先的に支援活動を実施し、ゼミ単位の取り組みから開かれた活動へ補修支援事業の輪を広げていく。

事業名	平成 23 年度能登キャンパスゼミナール事業 「奥能登の祭礼継承支援への取り組み—祭りの観光資源化と子どもたちの継承意識の研究」	
実施主体	石川工業高等専門学校 熊澤ゼミ	
活動形態	活動場所	珠洲市
	活動人数	石川工業高等専門学校 熊澤栄二教授 金沢大学地域連携推進センター 堀内美緒研究員 ほか 2 名 計 4 名
	期間	平成 23 年 4 月 1 日～9 月 4 日
活動内容	<p><課題></p> <p>珠洲市を代表する祭りである「キリコ祭り」を題材に、奥能登で深刻化する祭礼の衰退現象と、その原因を明らかにする。そして、祭礼を文化資源と位置づけ、保全・活用対策の方向性を探る。また、少子化が深刻な地域で、祭礼文化の将来の担い手である小中学生に対し、継承がどの程度、どのように行われているか、学校はどのように関わっているかを探る。</p> <p><活動概要></p> <p>祭礼の衰退現象については、5～9 月にかけて、珠洲市にある 10 公民館区すべてを対象に、各公民館長（50 代後半～70 代男性）と主事に、各地区の戦後以降のキリコ祭りの様子や廃止になったキリコ祭り、キリコ祭り以外の年中行事の歴史や現状をヒアリングした。祭礼の衰退原因やそれに対する住民の対応などを探った。</p> <p>小中学生の祭礼文化継承については、市内にある 9 小学校、4 中学校のすべての校長に、祭礼をテーマとした地域学習の有無などをヒアリングした。さらに、市内の全小・中学生にアンケートを配布（配布合計 1010 票）し、地区の祭礼への参加状況や、珠洲市の祭礼で伝統的に小中学生が担うとされている伝統芸能（太鼓、横笛、かねなど）の経験などを尋ねた。期間は 7 月 1 日～14 日で、976 票（回収率 96.9%）の回答を得た。</p> <p><活動成果></p> <p>各公民館長へのヒアリングにより、キリコ祭りの衰退タイプは、社会基盤変化型（電灯の普及や護岸工事によって巡行ルートを変更、都市部への人口流出により、帰省者の参加を待って祭りを開催）や、合理化型（祭りの夜の日にご馳走を振る舞う風習「ヨバレ」の料理の簡略化）など、大きく分けて 6 パターンあることが明らかになった。中でも全公民館区で共通していたのが、人口減少による人口構成の変化によるもの。研究では、珠洲市の平均人口増加率の関係から、富山湾に面した内浦地区と日本海に面した外浦地区では、時化が多く厳しい漁業条件にある外浦地区の方が人口減少の度合いも高く、祭礼の出し物巡行を取りやめが目立つことから、衰退現象の現れ方に地域差があることを示した。調査の結果から、祭礼の保全・活用対策としては、観光戦略を策定して交流人口を拡大さ</p>	

せること、また、行政や研究機関が組織的に関わって幼少期から郷土愛を育む教育を実践することなどを挙げる。

小中学生の祭礼文化継承については、祭礼への参加意識の高さや伝統芸能継承の実態に、地域差が大きいことが分かった。地域の要望に応じて、授業に継承活動を取り入れるなど、学校と地域が上手に連携しているところは、継承者の割合が多い。一方で、児童の自主性に任せていたり、学校と地域の連携体制が弱いところは、継承者の割合が少なかった。担い手である子どもの数へ減っているという危機に加え、従来の継承方法では少ない担い手を有効に育成できないということが明らかになった。

今後の対策としては、祭礼文化の継承活動には、学校と地域双方がどのように連携するかが、大切であると説く。また、太鼓や笛などの伝統芸能を習う上で、家族に習うよりも、公民館で地域でも名手として知られる「先生」に教わることで、子どもの自主性を引き出し、祭礼文化への関心を高めていることも分かった。地域ぐるみで大人が子供に継承、育成する体制を考えることが効果的であると結論づけた。

事業名	平成 23 年度能登キャンパスゼミナール事業 「過疎農山漁村地域における人材マップとその活用による交流人口推進策の検討」	
実施主体	金沢星稜大学人間科学部 池田ゼミ	
活動形態	活動場所	穴水町
	活動人数	－
	期間	平成 23 年 8 月 14 日～平成 24 年 3 月 4 日
活動内容	<p><課題></p> <p>穴水町を対象に、過疎高齢化が深刻な地域において、自然や歴史、文化、人々の暮らしが今後どうなるのかを検証した。さらに、本研究として、学生が実際に地域へ足を運び、そこに暮らす人々や行政と直接関わることで、人材調査・発掘、外部から訪れる人との交流を促し、交流人口の拡大や地域活性化につなげる。研究では、豊かな地域資源の中に生きる人々を「奥能登人」と呼び、最も魅力的で大切な存在と位置付ける。</p> <p><活動概要></p> <p>約 8 カ月間にわたり、「沖波大漁まつり」や「甲曳き舟まつり」、穴水町駅伝競走大会などの地域行事に定期的に参加。住民と交流、協働作業に取り組む中で、地域の現状や課題に理解を深め、奥能登人のエネルギー感を肌で感じる体験をした。</p> <p>また、「子どもエコロジーキャンプ」や「子ども農村漁村体験」など子ども向け行事にサポートスタッフとして参加し、次世代を担う子どもたちに地域の魅力を伝えた。</p> <p><活動成果></p> <p>奥能登に生きる人々と直接交流したことにより、その地域に生きる「奥能登人」の人的魅力の高さが明確になった。これを受け、地域の伝統行事や各種イベントを詳細にマップ化し、奥能登人や豊かな資源の魅力を外部に向けて積極的に発信することで、交流人口の拡大、地域活性化に結び付けることが重要であると示した。</p>	

事業名	平成 23 年度能登キャンパスゼミナール事業 「能登町柳田地区の文化遺産調査と利活用～「町野荘」の調査を中心として」	
実施主体	金沢学院大学文化財学科 東四柳ゼミ	
活動 形 態	活動場所	能登町
	活動人数	—
	期間	平成 23 年 8 月～平成 24 年 3 月
活動内容	<p><課題></p> <p>能登町柳田地区（旧柳田村）に、中世（平安後期から戦国時代）を通して存在した能登国第 2 の広さを誇る荘園「町野荘」の文化遺産・景観調査と利活用法を考える。町野荘は町野川上・中流域の能登町柳田地区および、輪島市町野町の一部、旧能都町鶴町付近にあったと推測されている。調査を基に、町野荘普及活動の提案も行う。</p> <p><活動概要></p> <p>柳田地区全体を対象に、町野荘に関係があると思われる寺社や石造器物、史跡、伝承、地名を調査。町野川右岸の台地上に所在する「石井の街並み」の現地調査では、知内に中世遺跡が複数個所存在し、さらに集落北側は中世の武士の居住跡とされる「タチ」「タチワラ」の通称で呼ばれていることを確認。大正時代の文献によると、当時その場所には定期市が開催されていたことが記載されており、中世には市場が形成されていたとことをうかがい知ることができた。</p> <p>また、総持寺文書によると、総持寺に「五之田名」という水田があり、その水田は室町中期の応永 30 年に、幕府の役人により売却されたとの記載がある。荘園の特徴に基づいた現地調査の結果、その水田は現在の久田五田地区であると確認。現在も水田として利用されており、文書に記載されている当時の景観が現代まで残されていることが判明した。</p> <p><活動成果></p> <p>柳田地区には、町野荘を構成する寺社や史跡などの文化遺産が多く、歴史的な風景を今に伝えている。石川県内において中世の姿が残されている例は珍しく、今後さらに調査を進めることで地名（屋号）や水路、祠堂など町野荘全体の景観を復元することも期待できる。</p> <p>また、今回の調査内容は新しく立ち上げたホームページ「町野荘を歩く」での紹介や、見どころを記載したパンフレット、広報紙などを作成して普及活動を展開した。</p>	